

EMECS

NEWSLETTER

No. 25

「第7回世界閉鎖性海域環境保全会議 (EMECS7/ECSA40)」開催結果

第7回世界閉鎖性海域環境保全会議 (EMECS7/ECSA40) は、2006年5月9日から12日までの4日間、フランス バス・ノルマンディー地域圏 カーン市のカーン・エキスポ・コンgresセンターを会場として、「閉鎖性海域の持続可能な共同発展：私達の共有責任」をメインテーマに、25カ国から約350人の参加を得て開催した。

開会セッション

1. 開会式

EMECS7/ECSA40国際組織委員長のニコル・ル・ケルレ カーン大学学長の開会挨拶、地元からバスカル・プレエル カーン市副市長、ファビエンヌ・アレグ・デュイズム バス・ノルマンディー地域圏環境持続可能開発局長、ジャック・ロンボー ノルマンディー・セヌ水道事業団代表の歓迎挨拶、フランス中央政府からユーゲ・ブジージュ エコロジー持続可能開発省の大臣代理による歓迎挨拶があり、その後、各主催者 (EMECS, GEMEL, ECSA) 代表が挨拶を行った。

(財)国際エメックスセンター理事長の井戸敏三兵庫県知事からは、エメックス会議の経緯や、環境の修復・創造、環境教育、地球温暖化対策等の環境問題の重要性を訴えるとともに、第7回会議の成果への期待等について挨拶が行われた。

2. 基調講演

開会式に引き続き、基調講演が行われ、(財)国際エメックスセンターの茅会長から、北大西洋における海流の大(熱塩)循環への影響等について、また、英ニューキャッスル大学のエバンス教授からは、沿岸海域の環境保護を我々の共有責任とする統合的管理の重要性についての講演があった。

◆「沿岸域への気候変動の影響と可能な対応」

茅 陽一 ((財)国際エメックスセンター会長 東京大学名誉教授)

◆「共有する責任：沿岸域管理のためのコミュニティ活性化手法としての環境プロジェクトへの参加」

スチュアート・エバンス (英ニューキャッスル大学教授)

欧州沿岸海域セッション

欧州沿岸海域セッションでは、開催国のフランスを取り巻く、北海/バルト海、地中海、及びフランス側の北海/イギリス海峡を取り上げ、3人の専門家による講演が行われた。それぞれの沿岸海域における環境問題に対する取り組みに関して、欧州の沿岸海域の生態系システムの自然可変性(変動/ゆらぎ)および複雑性について、現状とその最新の取り組みが紹介された。

◆「北海とバルト海における科学と管理：歴史と現在の脅威と将来への挑戦」

マイク・エリオット (英ハル大学教授)



◆「地中海沿岸の管理—地域レベル—」

エルダール・オーザン (MEDCOAST会長)

◆「欧州大陸西部の広域海域：」

フランス側の北海、イギリス海峡、大西洋の沿岸域の事例

ジャンクロード・デュバン (仏リール大学教授)

特別セッション

3つの特別セッションが開催された。特に、アジア太平洋沿岸セッションはEMECS2001から、青少年環境教育交流セッションはEMECS2003から開催が継承されているセッションであり、セッションとしての更なる進展が見られ、参加者からも高い評価を得た。

1. アジア太平洋沿岸セッション

本セッションは、アジア太平洋地球変動ネットワーク (APNセンター) と国際エメックスセンターが進めてきたアジア太平洋沿岸域の現状と政策提言に関する書籍の紹介と、スマトラ沖地震による津波や台風などの被害を教訓にした沿岸域の危機管理と環境保全の提言を行うことを目的に開催された。

まず、APNセンター及び国際エメックスセンターの活動を紹介、続いて、アジア太平洋の沿岸域の脆弱性と危機管理に関する講演があった。

その後、スマトラ沖地震の津波による関係諸国の状況と取り組みについて、タイ、インドネシア、スリランカの事例、統合的沿岸域管理 (ICM) のための津波後の方向性、および復旧活動とその教訓について各々の講演があった。

パネル討論では、ニック・ハーベイ (オーストラリア アデレード大学教授) コーディネーターより、沿岸域の脆弱性は人口の集中が原因であり、この津波を忘れずキリバスなど人口の集中していない国にも目を向ける必要があるとの総括があった。

目次	EMECS 7 開催結果.....	1～3	第8回エメックス会議開催地決定.....	5
	会議宣言.....	3	JICA研修報告.....	5
	青少年環境教育交流セッション.....	4	ノルマンディーからオリスターノまで〈2〉.....	6～8

2. 青少年環境教育交流セッション

本セッションは、ウェイン・ベル（ワシントン大学環境科学センター前所長）座長、川井浩史（神戸大学内海環境教育研究センター長）を副座長に、次世代を担う参加者（青少年）が水を中心とした環境保全の取り組みを紹介することにより、各国の情報を共有するとともに、各国の参加者同志の交流を図ることを目的に2日間にわたって開催された。

1日目は、日本、アメリカ、タイ及び地元フランスを含めた4カ国から自国における独自の取り組みの発表があり、約20名の参加学生に教職員等や一般参加者も加わり、活発な質疑応答やワークショップ形式での意見交換が展開された。また、日本のため池の保全と活用に関する質問に対し、井戸理事長が、ため池の安全管理の重要性や多目的利用の促進、農業従事者から地域や利用者による管理への移行の必要性について述べる場面もあった。

2日目は、オルヌ川河口域にある湾に移動し、地元のブラインヴィレ中学校1年生が環境活動として湾内で行っている浜辺に打ち上げられているさまざまな漂着物を拾い、それらを4分別（植物由来、鉱物由来、動物由来、人工物由来のもの）するという活動を体験した。体験後、デュモン・ダーヴィル高校へ移動し、学生同志の交流を深めた。

セッションのまとめとして、「青少年環境教育交流セッション宣言」が参加者により作成され、閉会セッションにおいて発表された。

◆日本人学生参加者並びに発表テーマ◆

- ・ 迫之上杏奈（兵庫県立農業高等学校3年）
「守れ！先人の財産～いなみ野ため池群世界遺産化計画～」
- ・ 有田祐起（広島学院高等学校3年）
「水富栄養化の原因となる物質の除去に関する研究」

3. UOF（仏海洋科学者連合）若手研究者フォーラム

UOFフォーラムは、博士課程に在籍する学生達が参加するミニ・フォーラムで、運営はEFMS（欧州海洋科学者連合）が行い、会場はカーン大学で大学の全面協力を得て、EMECS7会議と同時並行で開催された。参加者は熱心に研究成果を発表し、若手の研究者たちに国際的な研究発表の場を広く提供するという目的が達成された。

また、参加者の中から、以下のベスト発表およびベストポスターが選ばれ、閉会セッションで表彰された。

<ベストコミュニケーション賞：UOF賞>

- ・ オルリー・フォーヴォー（Station Marine de Wimereux）
「堆積物の表面に付着した有機物、ドーバー海峡の砂利に付着した有機物に関する長期にわたる変化の研究」

<ベストポスター賞>

- ・ サビース・スタシヨフスキー（LUMAQ, IUT de Quimper）
「In-situ微小生態系（マイクロゾム）における、海洋植物プランクトン群集への農薬影響評価ツール」

技術セッション

技術セッションは、5つのテーマによる分科会に分かれ口頭発表及びポスター発表が行われた。

1. 口頭発表

- <セッション1>沿岸海洋科学における近年の進歩
生物多様性・生息域・環境条件の関係、物質循環における閉鎖性海域の役割、人為的な移入と回復プロセスなどについて発表と討議が行われた。沿岸の回復には、生態学的な新しいレメディエーション手法が有望とされた。また、数値モデルの効果的な利用とその限界性についても議論がなされた。包括的なアプローチ事例として英虞湾の環境修復プロジェクトの報告があり注目された。
- <セッション2>生態系の特質：コンセプトとケーススタディ
主として環境を示す指標等に関する発表と討議が行われた。生態系の特質を示す指標は多様で、指標化のためのデータ不足やモニタリング改良の適切な指標の選定などが課題であり、指標のテストお

よび相互確認や、空間及び時間の変化を考慮すべきとの報告もあった。また、データ共有のためのデータバンクや、指標と施策を分かり易くすること、地域主体の参加などが重要であるとされた。

- <セッション3>沿岸域管理における新しいコンセプトと新たな経験
地域社会の人と沿岸域との共生・共存のための合理的なビジョンとして、「里海」が評価された。また、沿岸管理の進歩は高度で多面的なものになるとの指摘があるとともに、ICMには、国際、地域、国、地方の各レベルの連携が必要であるとされた。

- <セッション4>協働と地域社会からの参画
- 環境問題への継続的な取り組みと啓蒙
統合管理には、沿岸域の多様性を認識した体系的アプローチが必要であり、かつ地方によるプロジェクトの支援や住民参加が重要であり、また、地方、地域、国レベルでの関係者間の連携など縦横の統合が必要であるとされた。さらに、この場合に人々の文化、歴史、社会的経済的背景を忘れてはならないことが指摘された。

- <セッション5>ネットワークと21世紀における教育
- コミュニケーションの挑戦

体験型環境教育が効果的であることが指摘され、環境管理と教育を複合的に進め、多方面からの情報や解決策を共有するとともに、その解決策を見いだすには、住民参加を通じたコンセンサスづくりが必要とされることが指摘された。



2. ポスター発表

口頭発表同様、5つのテーマに沿ってポスター発表が行われた。その中から、ポスター選考委員会（委員長：松田治（広島大学名誉教授）、委員3名）により、以下の3作品が選出された。

<ベストポスター賞>

- ・ 瀬口昌洋（佐賀大学教授）
「有明海奥部における貧酸素水塊の発生とその防止法について」
- ・ ドゥボア・スタニスラ（仏カーン大学大学院生）
「カキ養殖の及ぼす影響によるガンセキフサゴカイ（Lanice conchilega）個体数に係る底生生物群集：安定同位体を用いた栄養的アプローチ」

<特別賞>

- ・ ウィリアム・リー（米メリーランド州ボルチモア郡高校生）
「メリーランド州ボルチモア郡の環境に優しいグリーンスクール～教室、学校、地域社会を単位とした総合的環境教育～」

閉会セッション

閉会に当たり、地元の代表として、シビル・ショット バス・ノルマンディー地域圏知事、及びリュック・ダンコンブ カーン都市圏共同体会長より挨拶があった。

挨拶に続き、5つの技術セッションおよび3つの特別セッションの総括が、各セッションのラポーターより、ラウンドテーブル形式で報告され、各ラポーターと会場との間で活発な議論が展開された。また、エメックスの将来への進むべき方向等が提案された。

表彰式では、ポスターセッション賞、UOF賞、Coastal Zone Management 2006賞の表彰が行われた。

会議宣言に関しては、今回初めて「青少年環境教育交流セッション宣言」が発表され採択された。また、ウェイン・ベル宣言起草委員会委員長より、会期中に検討された会議宣言「カーン宣言（案）」についての提示があり、満場一致で採択された。

次回、第8回エメックス会議（EMECS8）の開催地について、陳中原、華東師範大学教授により、2008年10月末か11月頃に中国・上海で開催したいとの華東師範大学学長からの歓迎メッセージが読み上げられ、開催地が発表された。

最後に、主催者を代表して、熊本信夫（財）国際エメックスセンター

科学・政策委員長（北海学園大学前学長）より、EMECS7/ECSA40について、環境保護の為に我々の共有責任を考える事、すなわち、我々が次世代の為に何をすべきであるかについて考えることが、緊急な課題で

あるとの総括、並びに本会議の関係者へのお礼の挨拶が行われ、全ての行事を終了した。

会議宣言＜抜粋＞

カーン宣言

我々の提案は以下のとおりである：

- 知識、技術的な進歩は、科学者に対し、「共存活動の圏域」がどのように機能するかについて、実に多くの新しい知識を提供してきた。今日、かつてないほどに、我々は科学者に対し、我々みんなが「私達の共有責任」をより効果的に果たせるように、その知識を政策立案者、市民に対して伝達してくれることを願っている。
- 研究者、学者の枠を越えて専門知識を共有、伝達していくためには、一般の人にも分かる平易な言葉に置き換える必要がある。我々は、環境教育の専門家やNGOが若者達や市民に対し、知識の翻訳者としての役割を担い続けてくれることを強く希望する。この場合、知識の翻訳者としてのEMECSの役割はますます重要であり、それはインターネット上のネットワーク活動に限らず、全ての分野から人々を集める触媒としてのEMECSが、「私達の共有責任」を実現するために努力していくということでもある。EMECSは、会議やワークショップの結果を、より広く人々に知らしめるための指導性を発揮していくことが期待されている。
- 地元レベルでの「責任」は、地域レベルの、あるいは全国レベルの、ひいては地球規模の問題であるが、これこそ、「私達の」沿岸海域が抱える問題で、政府や組織によっては、しばしば軽視されがちである。このようなトップダウン的な（上意下達的な）アプローチは、沿岸海域管理にとって重要であると実証されている。しかし、地域社会の参加なしにはプログラムは持続されないのは明らかである。我々は、地元のリーダーや市民自身が「私達の共有責任」という立場から、積極的にプログラムを支持し参加してくれるよう地元根づいたプログラムが今後も継承、発展することを願うものである。
- タイのバンコク市で開かれたEMECS2003では、エメックス青少年環境教育交流セッションが初めて導入された。これを受けてEMECS7においては、50人以上の学生、教師がポスター発表、口頭発表、特別セッションでの公開討論を通じて、あるいはフィールドトリップのホストとして貢献した。これは「私達の共有責任」の全てのレベルと意義を実現する、素晴らしいイニシアティブとなった。我々は、心から「私達の」青少年環境教育交流を支持したい。我々は、EMECSに対し、賢明、かつ思慮深く多大な貢献をしているこれらの献身的な学生、教育者達に深く感謝するものである。
- EMECSの歴史からも、世界の生息可能な土地の分布という観点からも、北半球の沿岸海域に重点を置く視点が固定化している。しかし、「私達の共有責任」が名実ともに地球規模になるためには、EMECSは、南半球、つまりアフリカ、豪州、南米にイニシアティブを追求する必要がある。この宣言により、我々は、このための方向での努力に敬意を払い、今後これらの大陸での市民に「私達の」活動に参加するよう望みたい。

EMECS7/ECSA40参加者一同
フランス カーン市
2006年5月12日（事務局仮訳）

青少年環境教育交流セッション宣言

私達の世代には、無限のエネルギーがあります。強い決意があります。遠大な夢もあります。私達の宣言で提案することはたったひとつですが、私達にとって一番大事なことで、それは、「どうか、これらの夢を実現する手助けをしてください」ということです。

地元の環境を体験するような教育プログラムを進める手助けをしてください。

教師が、理科、数学と同様に歴史、文化、経済を教える場合、環境教育に関する多様な話題を生かして自然環境教育を行なうことのできるよう、支援してください。

私達人間は、環境に対する侵略者でも汚染者でもなく、自分たちが住む環境を構成する一員だということを感じ、理解できるような環境教育プログラムを積極的に進めてください。

私達は、大人の皆さんの観知と経験と技術から大きな恩恵を受けています。それら観知と経験と技術を私達にも分け与えてください。

私達は、私達の世代に残してくれる沿岸海域の遺産を受け継ぐのですが、その際、環境破壊を最小限のものとして、この遺産を、大人の皆さんがこれまで享受したように、私達も同様に享受し、生命の息づく伝統として慈しみ、感謝できるように、最大の努力を尽くしてください。

フランス・カーン
2006年5月12日（事務局仮訳）



詳細は、(財)国際エメックスセンターの
ホームページを参照下さい。
< http://www.emecs.or.jp/japanese/f_kaigi_jr.html >

青少年環境教育交流セッション

本セッションは、EMECS2003から継続開催したセッションで、前回のプログラムを継承・発展させました。各国の次世代を担う若者が、情報や知識を共有することのみならず、今回初めて「青少年環境教育交流セッション宣言」を作成し、発表するという特筆すべき取り組みがなされました。

今回もセッションに対して高い評価を頂き、閉会セッションのラウンドテーブルにおいて、『青少年環境教育プログラムを更に発展させるとともに新しい取り組みを検討する』という、セッションに対する今後の継続と更なる発展を期待する提案がされました。

本セッションの参加学生から帰国後に寄せられた所感を紹介します。

EMECS 7 に参加して

初めて国際会議に参加する機会を頂き、何もかもがとてつもなく新鮮な経験だった。特に青少年セッションでは、自国の環境問題に対する同世代の仲間達の熱心な取り組みを具体的に知ることができ、発見があり共感があり、大いに刺激された。



閉会式で青少年代表として宣言を読んだ際、会場から温かいスタンディングオベーションを頂いた。25カ国の様々な分野の専門家や市民の方々の、環境問題への情熱や僕達への激励が伝わり、とても感激した。この熱い想いを受けとめ、更に活動の輪を広げる努力をしていかなければならないと強く思った。今回の経験を学校でみんなに報告するとともに、環境保護のために毎日身近なことから実践し、水質改善の研究もさらに深めていきたい。

最後にEMECS7に参加した友人達へ伝えたい。僕達は、前の世代から決して負の遺産を押し付けられるのではない。地球規模の視野に立って環境を保持するために、協力し責任を果たすチャンスを貰うのだと思う。僕達が共有するかけがえのない地球環境に感謝と尊敬の念を抱き、さらに次の世代に立派に引き継ごう。

広島学院高校 有田 祐起

世界の視点・私たちの視点

私は、今回の様な国際的なセッションに参加したのは初めてでした。しかし、自分にとってとても為になる素晴らしいものをたくさん得られたと思っています。



例えば、今回のセッションで「幅広い視野で物事を見る」ということを学びました。私は今まで、自分に関わる環境問題として「ため池」という1つの物事にしか着目していなかったのですが、他の学生の発表を聞いて環境問題1つについても様々な見方があることに気付かされました。

その今回学んだことを生かし、今後はため池1つに着目するのではなく、ため池につながる海や河、山などに着目したりして、幅広い視野で活動して行きたいと思っています。そのためには、地域の方々と協力しつつも、自分たちが自ら進んで新しい視点で将来のことを考え環境問題に取り組むことが大切だと思います。

今回の様な、様々な国の学生と交流し、私たちの視点で環境問題について意見を交換するという、素晴らしいセッションに参加出来たことに感謝したいと思います。これからも、私たちの地球は私たちが守りたいと思います。

兵庫県立農業高等学校 迫之上 杏奈

私達、次の世代が得たこと：環境についての知識、経験や高い意識と理解

今回、私は、母国アメリカから外国への初冒険、そして国際的なエメックス会議への初参加を一度に経験することができた。世界の環境問題と、それらの問題を軽減するための様々な方法について、多くの知識を学んだ。



各国で繰り返し起こっている問題の1つは富栄養化である。陸からの流入水や肥料などを通して水域に入ってくる過剰な栄養分によって引き起こされる問題である。過剰な栄養分は、水環境に致命的なダメージを与えることがある。このような世界の閉鎖性海域における一般的な問題とともに、これらの問題解決の為の様々な改善方法を共有することもできた。

また、環境への意識・理解や環境政策が、世界各国の学校システムに組み入れられている様子についても学んだ。

青少年環境教育交流セッションでは、フランスの中学生徒と共にオルヌ川河口域へ出掛け、彼らのイギリス海峡でのプロジェクトを手伝った。彼らは、説得力のある文章を書く方法の学習に、その一題材として環境を組み入れていた。

会議で学んだ様々な知識は、大学生活における自分の研究や適切な専攻を決める際に活用できると思っている。

エメックス会議は、環境やその資源について生涯にわたる貴重な経験、深い知識、そして高い意識と理解を与えてくれた。

バルチモア郡 技術・環境科学西高等学校
William Lee (U.S.A.)

エメックス会議に初参加して

今回、エメックス会議に初めて参加し、大きい感銘を受けました。会議を通じて多くの事を学びました。環境の重要性や他の国の環境管理の方法について更に学びました。



EMECSは、青少年環境教育交流セッションにおいて、私が津波の経験を、他の国の学生参加者や聴衆と共有する機会を与えてくれました。私は、「Science Tsunami camp」というタイトルで、津波がタイに及ぼした影響、私の所属している「Volunteercamp club」が、人々を支援した内容やその取り組みについて発表しました。実際、私自身は津波に遭ったことはありませんが、キャンプへの参加を通して、津波がどれほど恐ろしいものかよく分かりました。

「急いで、津波が来るぞ！」という叫び声を聞いた時、小さい子を抱えて大きい子を連れて、不安そうな表情で走っていた親の光景を、私は今でも記憶しています。その時、幾つもの考えが私の脳裏に浮かびました。『巨大な波が私の方にやって来たらどうしたら良いのか、私は生き残れるのか……』本当に恐ろしい思いがしました。運よく何も起きませんでした。そのことは、忘れられない強心に残った体験となりました。津波問題は収束しても、私たち「Volunteer Camp Club」は、地域社会に直接支援の手を差し伸べるという取り組みを実行し続けています。

あなたも、EMECSから知識だけでなく仲間を得ることができるでしょう。私は、「チャンス、ブレインストーミング、人の結び付き、そして良好なコミュニケーションは、より良い環境のための優れた協働をもたらす」と思います。最後に、今回のように、いつかまた一緒に活動を楽しむ機会が持てることを望んでいます。

チュラロンコン大学
Thanchanok Udomsup (Thailand)

次回会議の 開催地決定

第8回 世界閉鎖性海域環境保全会議（エメックス会議）は 2008年に中国・上海で！

第7回エメックス会議の閉会セッションにおいて第8回エメックス会議の開催地が発表されました。今後、組織委員会が立ち上げられて、会議の概要について検討されます。

次回会議の開催地となる中国、上海より、俞立中（Lizhong Yu）華東師範大学学長からのメッセージをご紹介します。

過去16年に渡り、エメックス会議は日本、アメリカ、スウェーデン、トルコ、タイ、フランスにおいて成功裏に開催されてきました。自然科学者や政府関係者、産業関係者など5,000人以上の専門家がこれまでの会議に集い、さらに学生の方々にも多くご参加いただきました。

エメックスセンターは、設立以来、人間社会がもたらしたばかりいた地球の環境保全を推進する助けとなる多くの基礎知識を普及してきていました。また、今回の会議を含むこれまでの7回の会議を通して、個々のエメックス会議宣言により、地球環境の悪化に影響を与えるマイナス要因をどう克服するかについてのコンセンサスの形成に尽力し、多大な貢献をしてきました。時間の経過と共に、世界において、これらの取り組み

がその時代に適したものへと変化していくであろうと確信しております。

第8回エメックス会議が、2008年10月末に中国上海で開催されることが決まりました。華東師範大学を代表し、この決定に対する感謝の意を表します。2008年秋に開催されるこの会議の成功に向けて、みなさまのご協力を得ながら準備を進めて参りたいと存じます。

第8回エメックス会議において、皆様を上海にお迎えする日を楽しみに致しております。

俞立中（Lizhong Yu）
華東師範大学学長

JICA 研修報告

2006年度 閉鎖性海域の水環境管理技術Ⅱコース

財団法人国際エメックスセンターは、独立行政法人国際協力機構（JICA）から委託を受け、2006年8月21日から10月27日まで閉鎖性海域の水環境管理技術Ⅱコースを実施した。この研修には、中国、コートジボアール、インドネシア、サウジアラビア、タイから6名の中央及び地方政府の行政官が参加した。

この研修は、1990年に神戸で開催された第1回世界閉鎖性海域環境保全会議（EMECS' 90）で採択された瀬戸内海宣言の提言を受け、同年から研修が始まった。本研修は、発展途上国において沿岸海域の環境保護を推進する人材の育成に貢献することを目的としている。研修では、発展途上国において沿岸海域の環境保

護に携わる行政官が、日本で最大の閉鎖性海域で、1960年代及び1970年代の日本の高度経済成長の時期に深刻な環境汚染を被った瀬戸内海の水環境修復のために行われてきた環境管理手法を学んだ。

研修期間中、研修員は自国で役立てるため、そうした環境管理手法を学ぶとともに、学者や産業界の専門家と議論や意見交換を行った。

本件についてのお問い合わせは国際エメックスセンター事務局まで
電子メールアドレス < secret@emecs.or.jp >



ノルマンディーからオリスターノまで〈2〉

北海学園大学前学長
 (財)国際エメックスセンター科学政策委員長
 熊本信夫

5. ハーグの国際司法裁判所

8日朝、パリは北駅から、有名な赤い超高速列車「タリス(Thalys)」に乗って3時間、なだらかなフランスはノルマンディー南部の丘陵地帯を駆け抜け、ベルギーはブラッセルを経て、やがて豊かな水を牧草地の境に湛えたオランダに入り、ほどなく田園都市ハーグの国際駅に到着する。この沿線は、ヨーロッパでも有数の景観の良いところで、もちろん沿線の立看板などという無粋なものはない。自然が一番のもてなしである。日本の新幹線は早い、トンネルが多く自然の美しさを損ねている。

車窓からは、緩やかな弧を描く地平線まで緑一色で、ところどころに数頭の乳牛ホルスタインが散在し、水鳥が牧草境界の水辺に雛と遊ぶ。十七、八世紀のオランダの田園風景画の世界が、今なお、健在である。美意識を磨くというが、幼時から豊かな自然と名画に浸って目を養い、自然と美しさに対する感覚が育成されるのであろう。

このハーグで、オランダ国立沿岸・海洋管理研究所の統合沿岸域管理部(Integrated Coastal Zone Management)のフランク・フォンメーレン(Dr. Frank von Meulen)博士の出迎えを受けた。同氏は、MEDCOAST(地中海沿岸国際会議)のオザーン(Erdal Özhan)博士を支える主要なメンバーで、私の古い友人であるが、ハーグ国際駅から電車を利用し、その研究所までの途中、オランダ政府の教会建築風の議会、中世の面影を宿す裁判所など、主要な各政府機関のほか、レンブラントの「夜警」のブロンズ像形、国立美術館、海浜のパノラマ絵画館の案内を受けた。

彼によれば、ベアトリックス女王陛下の滞在中は、女王旗が王宮前に掲揚され、彼の部屋から見えるという。文字通り、王室と市民の間が、道路一本隔てた関係にある。王宮所属の立派な厩舎は、彼のオフィスから見下ろす位置にある。

ところで裁判所正面の高い壁面に、十七世紀に活躍した『自由海論』、『戦争と平和の法』の著者で、自然法論のフーゴー・グロティウス(Hugo Grotius 1583-1645)のほか、オランダの優れた法律家数名の名を発見する。その権威と名誉を称えているのであろう。裁判所前の小さな広場に憩う市民と大学者との距離も近いと書きたいが、はるか見上げる高さの壁面であってみれば、それはどうか。

かつて国際紛争の中心が、領海、領土のほか、貿易、海洋資源に関するものであったところから、海洋法学者は重要な役割を果たしたが、その識見はオランダにとどまらず、世界の海洋、法学に関する一般のルールを形成した。その意味で、グロティウスを生んだオランダに、国際連盟時代、常設国際司法裁判所が設置され、後、国際連合の下で国際司法裁判所となって、国際紛争がこの地で裁かれるのは自然である。

この国際司法裁判所には、海洋法の権威、東北大学の小田滋先生が、裁判官として3期27年の長きにわたり務められ、両裁判所



を通じ最長の記録となったが、2003年、惜しまれて退官された。1958年の夏、北海道大学法学部での集中講義の折、カードに書き取られた事例を引用しての、談論風発、とどまるところを知らぬ活発な名講義の日々が思い浮かんだ。

「30余年前、すなわち1974年の夏、「ハーグ国際法アカデミー(The Hague Academy of International Law)」に参加のため、この地に一ヵ月半滞在し、国際司法裁判所の法廷を見学する機会があった。事案は、アイスランド対西ドイツ・イギリスの、いわゆる鱈戦争(Cod War)であった。アイスランドは、周辺海域の漁場は自国の領海内と主張し、他方、西ドイツ・イギリスはこれを公海上と主張し、同国の漁船が操業中、アイスランドの駆逐艇が出動(?)、激突寸前まで発展したと聞いた。その開廷日、アイスランドは欠席、このため証拠調べなど実質的審理は行なわれず、もっぱら西ドイツ・イギリス側の短い意見陳述であっさり終わったように記憶する。」

ところで同裁判所裏のバラ園には、第一次世界大戦後の平和を願って名づけられた、1929年に新種として誕生した「ピース」という、黄色の花弁にピンクの縁取りのある気品のあるバラのほか、皇太子妃美智子妃殿下を記念した、紅紫色の「プリンセス・ミチコ」などの名花があって、市民は自由に入って楽しむことができたように記憶する。しかし今は安全確保のためか、休日のためか、正面の門は閉ざされ、門前の分離帯で、北京で弾圧を受けた中国の宗教団体の若者が一人、Tシャツ姿で横断幕と写真のパネルで「事の真相」をデモンストレーションの最中であった。裁判所周辺の樹林は変わらぬが、時代は大きく変化しつつある。

6. オランダの湿地と干拓

フォンメーレン氏の説明によれば、オランダは、国土の三分の一の低湿地帯を有するため、その水位と周辺海域の水位の調整、湿地水の海洋への放出による生態影響、自然災害に対する堤防の保全など、を如何に統合的に解決するか、の課題を抱える。多くの国々では湿地帯の保護が問題であるが、オランダの困難は、如

何に湿地を乾燥地に変えるか、にある。

司馬遼太郎によれば、「オランダは、堤防を作って内側の土地を干拓し、干拓地に運河を掘って地面を乾かし、運河の水を排水するポンプの動力として風車を利用してきた。海水との戦いがこの国の最大の課題であることは疑いないが、同時に生態保護も課題である。この国はその昔、ニシンで栄えた歴史を持つだけに、漁業資源の保護は海洋生態研究の中心であった。その実践、沿岸管理に関する知恵と経験は、明治日本の土木技術の発展に大きな貢献をなした」と述べるが、今日なお我々は、この国から多くを学ぶことができよう。フォンメーレン氏とは、今後のエメックスとの協力を約してハーグ国際駅で別れた。

7. ジェノアの「サヴォイ・マジェステック」

翌々日、アムステルダムからイタリアのミラノまで飛び、そこからジェノアまでは一時間余の普通列車の旅となった。乗客は少なく「タリス」とは設備も速度も大きく異なるが、ローカル列車の気楽さがある。アイスクリームを注文したが通じない。近くの紳士が、「ジェラート」と言い換えてくれた。そんな対応がここでは普通なのであろう。設備と速度のマイナスを、親切が補って余りある。

ジェノア線最後のトンネルを抜けると、そこがジェノアである。売店で「ウナ・カルタ・ジェノア？」と片言を並べると、売り子の少女が、「シ、シ、シニョーレ、グラーツツェ、ミッレ」と満面に笑み浮かべて返ってくる。「ドヴェ、ホテル・サヴォイ・マジェステック」と道筋を尋ねると、彼女は店を放って目の前の駅出口まで出て、「サヴォイ」への道筋を丁寧に教えてくれた。「グラーツツェ、ミッレ、シニョーラ」と、ここは紛れもなく、陽気で親切なイタリアなのである。

風格のある駅舎を出てすぐ左手に、桁外れに巨大な大理石の立像がある。「クリストフォロ・コロンボ (Cristoforo Colombo)、愛国者」と台座に刻みがある。ここがあのコロンブス生誕の地とは気づかなかったが、後にいくつかの案内書で、この地にコロンボが誕生し、その生家がなお保存されていると知った。我々は「コロンブス」と記憶にとどめるが、これは大英帝国時代の英語読みなのであろう。すると、スリランカの「コロンボ」は、大英帝国進出前の、ジェノア共和国時代の命名が残ったのかと考えたりもする。マレー半島の「メラカ」を「マラッカ」と言い変えた大英帝国の勢威も、ジェノアの権威に屈したか、あるいは敬意を表して「コロンボ」を、「コロンブス」に変えなかったのかは知らない。

そんなことを思いつつ、「サヴォイ・マジェステック」から、背後に延々と続いて黄金色に輝く住宅街を眺めると、その昔のジェノア共和国はさぞかしとその繁栄が偲ばれる。もっとも今日では、ホテルから海岸線の間に走る高速道路が、市街地と海岸を太く切り分け、海が市民から遠くに隔てられた感がある。

その高速道路を遠く回り道して渡ると、海岸に面して建設中の、ジェノア大学経済学部のコクリート剥き出しの、荒れ果てた建物群に直面する。いずれはエルサレムのように大理石板で覆われるであろうが、やや離れた隣接の、王宮に似た瀟洒な国立水族館とは著しく対照する。この水族館はその外観から見て、モナコの海洋博物館を凌駕する趣さであるが、閉館後とあって見学はできず、また、この地の海洋地理学者の某博士との面会予定も、氏の

都合で叶わなかった。しかしこの地には、地中海研究はもとより、港湾管理の長い経験と知識がある。今後のエメックスとの交流候補地として留意すべきであろう。

十五世紀のジェノアは、サヴォイア、ミラノ、モデナ、フィレンツェの各共和国に北と東西を囲まれた、細い海岸国家であった。背後に急峻な山岳地帯を抱えた小国だけに、したたかに商取引で財を築き、豊かな独立を共和国として享受し、北イタリアに堂々、君臨した。この誇り高い市民の意識があつて、南イタリアとは気性も習慣も異なる。バルコニーからは、神戸、長崎を凌ぐ感のある港湾に停泊する、数隻の巨大なコンテナ船も玩具のように見える。その行き先が南イタリアのナポリや、北アフリカのチュニジアであることからいえば、ここジェノアは、北イタリアと東地中海を結ぶ要衝の地であることがわかる。ちなみに冬のオリンピックのトリノは、ここから北へ山岳地を200キロほど入ったところにある。

8. オリスターノの「からすみ」

翌10日、まだ日の昇らぬうちに、郊外の小さな空港に向かい、アリタリア航空でローマを経てサルデーニャ (Sardegna) 島のカリアリ (Cagliari) まで、ほぼ1時間のフライトを楽しむ。地中海の紺碧の空と海を抜けて、イタリア第二の島、サルデーニャに着く。明るく小さな空港ロビーで、パウロ・マニ博士 (Dr. Paolo Magni) の出迎えを受ける。カリアリ空港からオリスターノまで、公共の交通手段がないので、彼の出迎えはまことにありがたい。彼が予約した「ドウオーモ (Duomo)・ホテル」は、民宿風の家族的なものですっかり気に入った。

同博士は、数年前、日本政府奨学生として岡山大学で日本語を学び、その後、香川大学、愛媛大学の大学院で博士号を取得し、目下、このサルデーニャの西海岸に位置するオリスターノ (Oristano) の「国際海洋センター (IMC-International Marine Centre)」で、国連の地中海海洋研究の一環としての研究に従事する特別研究員 (Senior Researcher) である。

この研究所は、1995年設立の研究、教育、訓練を目的とする国連 (UNEP-MAP) のNPOで、IMCの名称でイタリア半島西側の海洋研究を支える。同センター所長、レナト・コヴァッチ博士 (Dr. Reato Covacci) は、バルカン半島出身でその後イタリアに活動の拠点を移して今日に至る、海の男を強く印象付ける偉丈夫の風貌を備える。同センターは、同博士の下、研究員十数人の小規模なものであるが、研究対象をイタリア半島西側の海流、海洋生物の研究、海産資源の開発などに向け、この地域で高い評価を得ている。

この研究所の沿岸生態系研究グループには、マニ博士のほか、ジョヴァンニ・デ・ファルコ (Dr. Giovanni De Falco)、マウラ・パロリ (Dr. Maura



Baroli)、セレナ・コモ (Dr. Serena Como)、イヴァン・グアラ (Dr. Ivan Guala)、ジュゼッペ・ピエルガリニ (Dr. Giuseppe Piergallini)、シモーネ・シメオーネ (Dr. Simone Simeone) の各博士が在籍し、ここでの研究を進めている。

最近の研究のひとつは、この島周辺で取れる「マレット (Maletto)」という名の魚の卵から作られる「ボツタルガ (Bottarga)」（日本では「カラスミ」）の研究で、これはイタリアの水産加工業界に大きな貢献をしていることから、政府の財政支援があるという。

この研究は、スザナ・スモレンニカ博士 (Dr. Zuzana Smolenicka) を中心とするが、これは、イタリア「カラスミ」の遺伝子の研究により、輸入「カラスミ」と容易に区別できる方法の開発を進めるものである。この輸入原料は、主として北欧近海から安い価格でイタリアに運ばれ、加工され、サルデーニャ産として低価格で市場に出回り、サルデーニャ水産業界に打撃を与えているという。サルデーニャ原産と海外産の原料は、時間をかけて天日で乾燥させ、半透明の飴色になってしまうと、外観上は識別が不可能となる。遺伝子による判別方法が確立されると、この種の不正が駆逐されるという。

後日、丁寧なレクチャーに敬意を表して、カリアリ空港で見事な琥珀色の、どっしりしたサルデーニャ産の「からすみ」を求め、試食したが、なかなかのお勧め品である。

日本でも「北海道産」の「ししゃも」が、「北海道産」の「ししゃも」として市場に出たこと、この場合、「北海」は北海の海や、北海 (North Sea) を意味するから不当表示にはならないが、消費者には「北海道産」のイメージが伝わり、紛らわしいこととなる問題がある。これは生産者・消費者から厳しく批判され、是正されていることなどを伝えると、地球上どこにでもそういう類の者がいるので、私の研究も意義があると笑った。

パウロさんとは、オリスターノの海浜に面した彼の行きつけの「リストランテ・トリエステ (Trieste)」で、夕暮れの穏やかな潮風を受けながら同地の魚料理を注文して、一夕歓談の時を過ごした。彼の日本滞在は、多くの日本の研究者との親交によって実りの多いものであった様子で、香川大学や愛媛大学の研究者や、岡市友利香川大学名誉教授、柳哲雄九州大学教授など共通の知人の名が挙った。滞日中、香川大学で研究助手を務めた経験を持つパウロさんには、英伊両国語での多くの論文がある。

パウロさんは、日本で受けた親切と研究の機会を得て、イタリ

アは当然ながら、日本の愛国者になったようで、「サッカー世界選手権で、日本とイタリアのチームが決勝戦で対峙したらどちらを応援しますか」と水を向けると、「さあ、娘のマリーナも私もそれには困りますね」と流暢な日本語で笑った。マリーナちゃんは、彼にとって目に入れても痛くない、宝石のようなお嬢さん。両国の絆である。このような背景と研究歴を有する研究者が育っていることは、両国の海洋研究にとって大変心強い。いずれ大いに役立つ日が来ることを願った。

ところでオリスターノは、この島の中心地カリアリから北端のオルビアまで、南北に約250キロの間に位置するが、その地名を取ったオリスターノ湾がある。楕円形で長径15キロ、短径10キロほどの小さな湾で、漁業による経済が中心である。西端のサン・マルコ岬は、小高い丘で一般の立ち入り禁止区域であるが、丘の中腹から海岸への緩やかな斜面には、ローマ時代の集落跡があって、小ぶりの円形劇場跡に二本の円柱が立つ。聞くとローマ以前からこの地に多様な民族・宗教の襲来があって、破壊と建設、殺戮と同化、闘争と融和の果て、多くの血と文化が混交、融合してサルデーニャ独自の歴史が形成されたという。これは、キプロス、マルタ、コルシカなど地中海の島々に共通する。

そのようなこの島の歴史的背景を考えながらこの岬の遺跡を歩くと、アザミ、ヒルガオ、オオバコ、ヒヨウなど数種の見慣れた植物が、岩石の間の乾燥した土壌に根付き、花を咲かせているのに気がついた。形は北海道で見るとは変わらないことながら、いずれも形は小さく、肉厚の葉と茎に、日差しの強さに耐える貯水の知恵が観察される。遠い昔、イタリア半島から分離したこの島の植相は、基本的に北半球の植物群に属し、地中海の厳しい暑さに適合、進化したのであろう。

するとこの植物群の変成と同様に、島周辺の海洋生物にも北の海とは違った変化が見られるのではないかと思われて、にわかに魚市場に出かけたい気持ちに襲われたが、これはまたこの次の機会に残すこととした。

事務局からのお知らせ

ご賛同いただけるみなさまのご協力、ご参加を心よりお待ちしております。また、みなさまのお近くの方にも是非、本会をご紹介ください。

《年会費》	団体会員	100,000円
	NGO団体	30,000円
	個人会員	10,000円

《特典》

- 1 当センターが主催または共催するシンポジウムセミナー等に優先的に参加することができる。
- 2 当センターが有する最新の情報の提供を受けることができる。
- 3 当センターが実施する調査研究プロジェクトの形成などに参加できる。

* 入会を希望される方は、財団法人国際エメックスセンター事務局までお問い合わせください。

投稿募集

閉鎖性海域に関する研究や活動、会議、図書等の情報提供をお待ちしております。(謝金・原稿料はありません。)

編集・発行及び連絡先

651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-1 国際健康開発センタービル3階
TEL:078-252-0234 FAX:078-252-0404
HP: <http://www.emecs.or.jp> E-mail: secret@emecs.or.jp